

# 社会との関わりからみた児童養護施設退所者の抱える困難と生きづらさ

西 隼平\*・吉田国光\*\*

\*元金沢大学学部生, \*\*立正大学地球環境科学部

本研究は、非大都市圏に位置するX県の児童養護施設の退所者が、施設外でどのように生活を営んでいるのかを明らかにすることを目的としている。とくに退所後の生活で、どのような苦勞や困難があるのか、それらをどのように解決しようとしているのかを分析し、困難の固定化や生きづらさを生じさせてきた要因が社会のどのスケールで生じてきたのかに注目して整理し、他者との様々なスケールでの結びつきが退所者の生活に果たす役割を考察した。

その結果、困難や苦勞、生きづらさとしてお金を無計画に使ってしまった失敗や施設生活と社会人生活の差による消費の反動、他者との比較によって生じる孤独感、家族とのつながりがネガティブに作用することが挙げられた。行政や民間団体が実施する奨学金制度の利用や友人、職場の人、施設職員、家族といった様々な広がりをもつ社会との結びつきは、退所者の困難や苦勞、生きづらさを軽減させる部分とそれらを固定化させ、新たな困難を生じさせていた。

**キーワード**：社会的弱者、マイノリティ、社会的養護、児童福祉法、児童養護施設、ケアリーバー

## I はじめに

伝統的に日本の社会地理学では、民族的すみわけなどの地域差といった社会的特徴を描き出すことが研究の主眼であった（山下，1984；神谷，2018）。その後、地域差から生み出される様々な格差や、ローカルで生じている格差などの現実的な社会問題を取り上げることが主たる研究課題となっていく（水内編，2004；水内ほか，2002）。これらの研究で、社会問題はローカルな地域特有の条件のなかで自然発生的に生じるのではなく、より大きなスケールの社会・経済・政治的な情勢との相互関係のなかでつくられることが明らかにされてきた。特に社会的弱者やマイノリティがどのようにつくられ、いかに地域社会に包摂／排除されるのかが描かれてきた（原口，2003，2011，2012）。

その後、地理学の研究対象として取り上げられる社会的弱者やマイノリティは精神患者や視覚障害者などに広がり、彼・彼女らが現代の日本社

会でどのように生活を営んでいるのかが検討されてきた（田中，2015，2016；中島，2022，2023；松岡，2015；三浦，2016，2022）。こうした研究で、対象者のおかれる状況や特性が、現代の日本社会の仕組みのなかで、いかに馴染みにくいものとなっているのかが検討されることで、現代の日本社会もしくは日常生活レベルで生じている歪みの箇所も明らかにされてきた。

様々な社会的弱者やマイノリティの抱える困難が示されてきた一方で、日本の地理学では未検討とされる者の一つに、児童養護施設からの退所者が挙げられる。彼・彼女らは身体的に「健常」であることから「普通」の構成員として見過ごされてきた。しかし実態として、彼・彼女らは「普通」の構成員と比べて、はるかに困難な状況に置かれている（伊部，2013）。

児童養護施設の退所後も退所者への支援は2004年の児童福祉法改正で明記され、2017年に出された『新しい社会的養育ビジョン』<sup>1)</sup>にも自立支援や退所後の支援の継続に関する内容が記載